
姫さま、騎士と再会する

疋田 中

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姫さま、騎士と再会する

【Nコード】

N2682BA

【作者名】

疋田 中

【あらすじ】

あるところに、病弱なお姫さまとお姫さまに仕える騎士がおりました。

体の弱いお姫さまは、たくさんの出来なかったことを夢見ながら亡くなります。騎士は、大切な主の夢を叶えたいと思いながら、姫さまを見送ります。

このお話は、そんな二人が転生して出会って、夢を叶えていくお話になる予定。

二人の別れ（前書き）

登場人物が亡くなります。苦手な方はご注意ください。

二人の別れ

「……騎士さま」

か細い声と共に伸ばされたやせ細った腕を騎士の手が支える。

「姫……」

病の床に臥した主の負担にならないよう、騎士はそつと声をかけた。

「騎士さま、わたくしはもう長くありません……」

主は、目を閉じたままつぶやくように言う。認めたくない、否定したい。けれど、病弱な主の体が、もう病に絶えられないことは、ずつと側で守ってきた騎士が良く知っていた。主に嘘のつけない彼は、黙って首を横に振ることしかできない。

「……ごめんなさい。いつか、遠乗りに行きましょうと、言ったのに」

馬に乗って見に行きたいと願った花畑は、見る事ができなかった。

自分で足を運んで菓子を選びたいと言っていた城下の菓子屋は、行くことができなかった。

ここ数年は、室内から出ることも稀になるくらい、彼女の体は弱っていた。

今はもう、起き上がることもできない。

「わたくし、次に目が覚めたら、きつとすっかり体が良くなっているの」

そうしたら、騎士さま。二人で遠くへ出かけましょう。木のぼりもしてみたいわ。夏の小川で水遊びをするのも、きつと楽しいでしょう。いろいろなお店で食べ歩きをして、旅人に遠い国のお話をしてもらうの。

姫さまは、小さくかすれた声で、たくさんの楽しいことを語る。

「次に姫が目覚めたとき、私はきつとあなたの騎士として、あなた

を守りましょう」

そうして、姫。あなたを連れて何処にでも出かけましょう。遠乗りに行く前に、乗馬の練習をしましょうね。小川も良いですけど、海もきつと気に入りますよ。歩きながら食べるのは、お行儀が悪いと侍女に叱られそうですね。遠い国の衣装も、姫ならきつと似合うでしょう。

騎士は、涙で頬を濡らしながら、姫さまに応える。

二人は、来ることのなかった楽しい未来を語る。

いくつものやりたかったこと、見たかったもの、行きたかった場所を挙げ続ける。

いつしか、姫さまの声が聞こえなくなつて。

気付かないふりをした騎士の声だけが、語り続ける。

姫さまは幸せそうに笑つて、それを聞いていた。

もう開かれることのない姫さまの目から、雫がそつと流れて落ちて。

やがて、騎士の声も嗚咽に紛れて消えていった。

> i 3 8 5 8 8 — 4 8 1 9 <

二人の別れ（後書き）

一旦投稿したものの、設定を間違えていたため削除して投稿し直しました。
すみません。

プロットなどなく、てれつと書いていきます。
気がむいたときに続くので、お付き合い頂ける方はよろしく願います。

姫さま、騎士と再会する

新品の幼稚園生の服に身を包んだ幼児が、ベージュのスーツに身を包んだ母親とビデオカメラを回す父親に手を引かれて歩いていた。仲の良い親子三人は、色とりどりのチューリップが咲く花壇の脇を通りぬける。足を踏み入れた小さな庭には、たくさんの遊具が並んでいた。カラフルな遊具には紙の飾りがつけられ、この目出度い日に相応しく華やかな空間を作り出している。

「入園おめでとうございます」

エプロンをつけた女性が、小さな胸に花飾りをつけた。ひまわり組と書かれた札も付いている。

花飾りのお礼を言うと、黄色い帽子を被った頭を撫でられる。この女性は「幼稚園の先生」だろう。恐らく、自分が所属するであろう「ひまわり組」を受け持つ人。愛想良く振舞っておいて損はない。（…いけない、これは幼児らしくない思考だ。）

腹のうちでそんなことを考えながら、表向きに見せるのは、下心など感じさせない満面の笑みだ。こんな風に笑うのは、手馴れている。

ただ、そんなことを悟らせて今生の父母を悲しませる気は無いから、今の自分は無邪気な幼児として振舞わなければならない。

「おとうさん、おかあさん、行ってくるね！」

父母の手を離し、自分と同じ黄色い帽子をかぶった集団に向けて駆けていく。傍から見ればひよこの集団のように見えるのだろうか、と思いつつ、割り当てられた席に着いた。

＊＊

入学式が終わった。

とても短い時間だったのは、じっとしてられない幼児に合わせ

たものだったのだろう。それでも、親を探して泣き出す者や話に飽きて席を立つ者も見受けられた。

かつての自分が幼少の頃はとうであつたろうか。これほどに手の掛かる幼児ではなかったと思う。

「ひめ!!」

そう、かつての自分はお城のお姫様だったのだから。式典など日常茶飯事。

「ひめ、ようやくお会いできました!!」

まあ、体が弱くてほとんどでられなかったのだが。

そこまで考えて、ふと意識を現実に戻す。

目の前には、黄色い帽子を被ったちびっこが一人。妙にキラキラとした瞳で、自分を見上げている。

そう、見上げている。跪いて。

かつて、兄妹のように共にあつた騎士が忠誠を誓う、あのポーズで。ああ、この男も生まれ変わったのか。前世の記憶を持ったまま再び会えたことは、素直に嬉しく思う。

「ひめ、きつとお会いできると、信じておりましたっ!」

目を潤ませて、感激しているのだろう。感情がもろに表に出る。

これは、そういう男だった。

だが、時と場所を考えるとやってやりたい。周囲から向けられる好奇の目が、わからないのか。

「ひめ、私をあなたの騎士にしてください。どんなことから、きつと守ってみせます!」

小さな手が、自分の同じく小さな手をとる。ああ、懐かしい。前世で騎士の誓いを受けたときの、このポーズ。自分の最後に聞いた、その言葉。

しかし、今世の騎士の親は、どんな思いで彼を育てたのだろうか。自分の子どもがこんなのだったら、ちょっと、いや、かなり嫌だ。

「私に、今世の名をお教え下さい。騎士の誓いをさせてください、ひめっ」

かつての主に再会して、興奮しているのだろう。紅潮している少年のほつぺたを掴んで左右に引っ張り、言ってやった。

「おれは、男だっ！ひめじゃなーーーーい！！！」

これは、かつて病弱だった姫さまとその騎士の、ハッピーエンドへのはじまり。のはず。

> i 3 8 6 5 8 — 4 8 1 9 <

姫さま、騎士と再会する（後書き）

のりと勢いだけで書いています。

* B L にはなりません。

姫さま、わんぱくに育つ

寒風吹き付ける中、膝小僧をむき出しにした短パン姿の少年が木の上に立っている。

（こんな格好で外に出たら、ぜったい熱出してたよなあ）

二階建ての建物くらいの高さにある木の枝に仁王立ちして、少年は感慨深く思う。今回の体はずいぶんと丈夫にできているらしい。ありがたいことだ。

前世で叶わなかった木のぼりをするという夢がかなって、少年はご機嫌だ。冷たい空気を胸いっぱい吸い込んで、ぐんとのびをする。

「お前も早く来いよ。気持ちいいぞ！」

声をかけた先には、元騎士がいた。

顔を青くして地上でおろおろと歩き回っている。

「姫、危ないですよ！早く降りてきてください！！いや、危ないですから、ゆっくり、ゆっくりでいいから、降りてきてくださいっ」

前世では無茶なことなどする体力もなかったため、この騎士の慌てる姿など見たことがない。基本的に人の良い笑顔を浮かべている騎士ばかりが記憶にある。それ以外の表情といえば、熱を出した自分を心配して困ったように笑う顔くらいか。

（いや、俺が死ぬときには、泣き顔も見たな……）

そんなことを思い出して、少しばかり胸が痛む元姫さまは、現在小学3年生。前世でできなかったあれやこれやを行うため、日々活動的に過ごしている。そのため、膝小僧の絆創膏は、もはやトレードマークとなりつつある。

ちなみに、元姫さまに絆創膏を貼るのは、元騎士の役目になっていた。

（泣かれても、楽しくないしな）

心配のあまり泣き出しかねない顔でこちらを見上げる元騎士を見て、仕方ないな、と木から降りる。

ひよいひよいと降りていって、のこり１メートルに差し掛かったところで、油断した。

ずる、と片手がすべり、やばっと思った時には、浮遊感。

次の瞬間には衝撃を感じていた。

が、地面にしては柔らかい。覚悟したほどの痛みもない。

「姫、お怪我は！？」

体の下から聞こえた、元騎士の声。

慌てて飛び退いて、彼の手をとって起こす。こちらの心配ばかりしている元騎士に適当に返事をして、彼の服についた土をぱたぱたと叩く。同時に怪我がないかを確認すると、手のひらがすりむけていた。

「絆創膏くれ」

「姫、どこにお怪我をされたのですか！」

手のひらを彼に向けて絆創膏を要求すれば、顔色をさっと青ざめさせて、聞いてくる。

人のことばかり心配する元騎士にいらだち、勝手に彼のズボンから絆創膏を取り出して彼の手をつかむ。急にズボンに手をつ突っ込まれて驚いた彼が飛び退くのも構わず、つかんだ手を引き寄せた。

「怪我したのはお前。おとなしくしろ」

そんな恐れ多い、私などのことはお構いなく、などとわめく元騎士を無視して絆創膏を貼る。貼り終えたその手で彼の頬をつかみ、左右に引き伸ばしてやった。

「にゃ、にゃにをなさりゆのれすか、ひめ」

元騎士の言葉を聞き流しながら、頬を伸ばして遊ぶ。ひとしきり遊んでから、最後に伸ばせるだけ伸ばして手を離す。

「何で庇った」

「姫をお守りするのが、私の使命です」

問えば、即答された。予想通りの答えに、元姫さまは苦い顔をす

る。

「俺はもう姫じゃない。お前に守られる存在じゃないんだ」

「それでも、私にとって仕えるべき人。守るべき人は、あなたです」
迷いなく、まっすぐに見つめてくる瞳は、たしかに前世の騎士と変わらない光を宿していた。わかっている。こいつは、そういう男だ。

それでも、ため息が出てしまう。だって、自分は。

「俺は、お前と一緒に遊びたいんだ」

ため息まじりにそう告げれば、元騎士はぽかんとした顔をしている。

「言っただろう。一緒に遊ぼうって。木のぼりしたい、川遊びしたい、買い食いもしようって、言っただろう」

忘れてしまったのか、と問えば、驚いた顔のまま元騎士は首を横に振る。

「俺は、お前を従えて遊びたいって言っただけじゃない。お前と一緒に遊びたいって言っただけ」

そう言えば、元騎士は感激に頬を染めた。その顔に機嫌を良くした元姫さまは、一番言いたかったことを伝える。

「俺は、お前と友達になりたかったんだ」

前世から、ずっと伝えたかった言葉。かつては身分のために伝えられなかった言葉。今ならば、こんなに簡単に言える。だから、仕えるなんて、守るべき人なんて言って、俺を遠ざけないで。

それを聞いた元騎士は、喜びのあまり泣き出した。涙でべちゃべちゃになった顔はとも間抜けだったが、あの、最後に見た苦しそうな泣き顔とは大違いで。

（こんな泣き顔も、できるんだなあ）

元姫さまはあきれて笑いながらも、元騎士が泣き止むまでその顔を眺めていた。

姫さま、わんぱくに育つ（後書き）

元騎士、ちびっこのときは結構泣き虫です。

元姫さまは、郷に入っては郷に従うタイプなので、少年らしく振舞っています。

少々、やんちゃが過ぎるようですが。

姫さま、お見舞いに行く

前日の夜にランドセルに入れる物を確かめるのは、元姫さまの日課である。

（国語と算数と、明日は音楽の授業があるな。…たて笛は必要だったろうか）

時間割表を見ながら教科書を集めていた元姫さまの手が止まる。音楽の授業は、歌を歌うときもあればリコーダーを使用するときもある。果たして明日はどちらであったか。

ランドセルにしまった連絡長を取り出して、ぱらぱらとめくってみる。

前回の音楽があつた日のページを見るが、リコーダーの必要性を示す言葉はない。今日の日付も確認するが、明日の「持つてくるもの」欄には、何も書かれていなかった。

連絡長を見る限り、リコーダーは不要なようである。しかし、持つてくるように言われたような気がするのだ。

（どちらだったか…考えるほどに不安になる）

不安ならば持つていってしまったえば良いのだが、このたて笛というやつは微妙にランドセルからはみ出る大きさをしている。不要かもしれないのに持つていくには、少々邪魔だ。

元騎士に電話で聞こうかと思つても、時計を見ると夜の九時を回っている。電話は控えるべき時間だろう。元騎士ならば姫さまに頼られたと大喜びで出るだろうが、常識的に考えてやめておいた。

（明日の朝、迎えにきたときに聞こう）

幼稚園での再会以来、あの男は毎日迎えに来るのだ。そのときに聞けばいい、と考えて、元姫さまは布団にもぐりこんだ。

結論から言うと、リコーダーは不要だった。

しかし、元姫さまのランドセルには、リコーダーが入っている。ランドセルからひょこりと飛び出すその邪魔なものを見て、眉をしかめる。

（なんだって、今日に限って休みなんだ！）

今朝、元騎士は迎えにこなかった。幼稚園の入学式から小学5年生になる今日まで、一度もそんなことはなかったのに。

おかげでクラスメイトには、不要なリコーダーを持ってきたことに關して笑われた。お姫さまはお供がいないと駄目なんだな、とかわれた。

担任の教師からは「風邪で休んでるから、宿題のプリント渡しておいて」と頼まれた。家が近い者など他にも居るだろう、と言ったら、いつも一緒に居るんだから、いいじゃないかなどと返された。あいつが付いてくるだけだと言っても、担任は笑うばかりだった。

そんなわけで、元姫さまは現在、元騎士宅に居る。

実は、再会してかれこれ六年の付き合いだが、元姫さまがここを訪れるのは初めてだ。それというのも、元騎士が「私などの家に姫をお招きするなど、恐れ多い」などと言うからだ。

まったくもって不愉快だ。

（友達になりたいと、言っているのに！）

腹立たしいことが重なって虫の居所が悪い元姫さまは、元騎士に文句と、お見舞いの言葉を言っただけで彼の部屋のドアを開けたのだが。

（寝てるのか）

ベッドの中、額に汗を浮かべて眠る元騎士がいた。熱があるのだろう、赤い顔で眉をしかめている。

こんなに弱った元騎士を見るのは、初めてだ。

その顔を見て、言いたかったたくさんの文句など吹き飛んだ。もう帰ろう。そう思い、元姫さまは持ってきた宿題を机の上に置いて、

そつとドアに向かう。

「…ひめ……？」

振り向けば、ぼんやりした顔の元騎士が体を起こしてこちらを見ていた。

「ごめん、起こしたか。もう帰るから、早く寝ろ」

近寄って布団に戻そうと手を伸ばすと、元騎士は体をひねってその手から逃れる。

「いけません、ひめ。あなたに風邪がうつったら大変です」

ショックだった。辛そうにしながら、自分を遠ざける彼にまた腹が立ってきた。

「…俺は、もう病弱な姫じゃない」

絞り出すように言えば、彼は首を横に振る。

「それでも、あなたが寝込む姿は、もう見たくない。お願いです、帰ってください」

「じゃあ早く布団に戻れ」

「あなたを見送ったら、戻ります。布団の中から申し訳ありませんが…」

「お前がおとなしく寝たら、帰る」

「ひめ、お願いですから…」

元騎士は、聞き分けのない子どもに対するように言う。いや、これは病弱だった頃の自分に向けられていた言葉だ。

「…いやだ」

嫌だ、泣きそうだ。

「ひめ…」

瞳を湿らせるものを我慢するために、元姫さまは拳を握り締めて言う。

「俺にも、お前を心配させる！」

ぽかんとした元騎士。涙目で起こる元姫さま。しばらく静寂が続いた。

その後、元姫さまの言葉に感激して大はしゃぎした元騎士は熱が上がり、元姫さまに大いに怒られるのだった。

姫さま、お見舞いに行く（後書き）

あれ、次は高校生くらいに飛ぶはずだったのに…。

なんでこいつら、寄り道ばかりなんだ。

姫さま、彼女ができる

にやにやにやにや。

元騎士の目の前で、だらしない顔でわらっているのは元姫さまである。元騎士の部屋でクッションを抱えて、視線はどこか宙を見つめている。時折、ちらちらと元騎士に視線をやっては、また視線をそらしにやにやと笑う。

「……………」

聞いて欲しいのだろうなあ、とわかっていながら元騎士が声をかけないのは、姫が笑っている理由を知っているからである。

（女生徒に呼び出されてから、この調子ですから…交際を申し込まれたのでしょね）

姫が嬉しいことは、自分だって喜ばしいことである。しかし、この表情の崩れようはいただけない。

「姫、お顔が崩れておりますよ」

姫という呼称は、中学生になった今では二人きりのときだけしか使っていない。今世を謳歌したいと願う主が強く願うものだから、他者がいる場では名前で呼ぶようにしている。

「いやあ、だつてさあ。前世では恋愛なんかできなかったし、これはもうまさしく春が来たーって感じなわけよ」

頭の中に春が来ていそうな顔で、元姫さまは言う。

よかったですね、と返しながら、元騎士はお茶のおかわりを渡すのだった。

＊＊

昨日の笑顔からうってかわって、元姫さまの顔には表情が無い。クッションを抱えた姿も宙を見つめる姿は変わらないのに、表情だ

けがごつそり抜け落ちている。

今度は何があつたのか。

交際を申し出てきた女生徒の呼び出しに応えて傍を離れた昼休みの後から、ずっとこの調子である。

「どうされたのですか」

姫の好きだった熱い紅茶を渡しながら、元騎士が聞く。

元姫さまは宙にあつた視線を手元に移し、ぼそりと礼を言ってから紅茶を飲む。

そのまま何も言わない姫に、元騎士も黙って待つ。

「あの女、キライ」

ティーカップから湯気がたたなくなるころ、元姫さまがつぶやいた。

前世でも今世でも、人の好き嫌いなど見せたことのない主の言葉に元騎士は驚いた。

「何かあつたのですか？外見が好ましいと仰っていたのに」

問えば、主は紅茶をゆらゆら揺らしながら、ぼそぼそと言う。

「あの女、お前と縁切れって言うの」

ティーカップから手を離し、自分の膝を抱える。

「大事な友達だから縁は切れない、って言ったら、じゃあ付き合わないとか言うの」

膝の上に顎を乗せて、ますます体を小さくする。

「意味わかんないって言ったら、俺とお前が仲良すぎて気持ち悪い、とか言うの」

抱えた膝に額を付けた元姫さまの表情は見えない。いみわかんない、とつぶやく声だけが聞こえる。

「それでは、私は呼ばれるまで離れていることにしましょう」

「いやだっ！」

元騎士が話しているのを遮って、顔を上げた元姫さまが叫ぶ。

「話したこともない女のせいで、お前と友達じゃなくなるのなんて嫌だ！」

主から怒ったような声音でそう言われ、元騎士は困ったように笑う。

「大変うれしいお言葉ですが、それでは同じようなことが再び起こらないとも限りません」

「…お前はそれで平気なのか」

元姫さまが押し殺したような声で言う。

応える元騎士は、微笑んでいる。

「あなたにお仕えすることを許されているのならば、どのような形でも私は構いません」

常にお傍に居られないのは、少し不安ですが。と付け加えた。

その笑顔を見て、言葉を聞いて、元姫さまの拳にぐっと力が入る。「なんだよ…せっかく、友達になれたと思ってたのに。お前は、違ったのか。友達だつて喜んでたのは、俺だけだったのか…！」

主からの言葉に元騎士は嬉しさを覚えるが、しかし首を振る。

「私の存在があなたを悲しませるのであれば、引くのは当然のこと」
こう言えば、納得してくれるだろう、と元騎士は告げた。しかし、主の顔は泣きそうに歪められていく。

「そんなこと頼んでないよ。傍に居るって言ったのは、お前じゃないか。今度はずっと一緒にいられるって喜んだのは、嘘だったのかよ…」

前世では叶わなかった、対等な関係で友情を築きたいのに。どうしてお前は拒絶する。よく知らない女との恋愛より、今日まで一緒だったお前との友情の方が大切なのに。なんでそれがわからない。

泣きそうな顔で怒ったように、元姫さまが言う。

元騎士は、黙って最後まで聞いていた。主が悔しそうな顔で押し黙り、しばらくして元騎士が口を開く。

「…すみませんでした」

気づけば日は落ち、薄暗い部屋で互いの顔はよく見えない。

「私は、前世と同じようにあなたにお仕えしているつもりでした」
うつむいた元姫さまをじっと見て、元騎士は続ける。

「違ったのですね。もう、あなたは姫ではない。私がお仕えし、お守りすべき姫ではない」

静かに立ち上がった元騎士は、元姫さまの手をそっととる。

「それでも、あなたは私の大切な人です。大切な、友人です」

はっと顔を上げた元主と元騎士の視線が合う。

「気がつくのが大変遅くなって、申し訳ありませんでした。こんな私でも、あなたは友人だと、認めて下さいますか？」

自信なさげに微笑む元騎士に、元姫さまの顔に笑顔が浮かぶ。

「遅いよ。遅すぎる」

元騎士の手をぱしりと叩き、それからぎゅうと握った。

「…けど、それでも、友達だからな。許してやるよ」

元姫さまの顔に、満面の笑みが浮かぶ。元騎士の顔にもほっと安堵の笑みが広がった。

再開して約十年。ようやく、元姫さまと元騎士は、お互いに友人として笑い合ったのだった。

姫さま、彼女ができる（後書き）

彼女、一日と持たず（笑）。

元騎士は意外ともてるので、元姫さま余計に「初・告白」が嬉しかったです。

姫さま、騎士になる

こんにちは、元姫です。皆さま、ご機嫌如何でしょうか。
え、口調がおかしい？

これには、訳がありまして…。

* *

「俺が騎士で、お前がお姫さま、ねえ…」

遠い目をした元姫さまが手にしているのは、一冊の台本だ。同じものが元騎士の手の中にもある。台本の中にあるお姫さまのセリフ部分にチェックを入れていた元騎士は、苦笑いをしながら顔を上げた。

「あなたが姫役で私が騎士役になれば、演技をする上では大変よりしかったのですが。しかし、くじ引きで決めたことですから、言っても仕方のないことはありません」

誰が言い出したのか、二人が所属する高校の文化祭で行うクラスの出し物の劇は、大道具から役者まで、全てがくじ引きで決められるという伝統があるらしい。もちろん、男女の別なく、である。

そのためお姫さまの役は男である元騎士が引き当て、王子さま役はクラスでも小柄な女子が担当することとなったのだ。

「いや。せつかく男に生まれたんだから、もう姫はいいよ。それに今の体で姫やったって、誰が楽しいんだ」

「それを言われますと、私が姫役をやることを楽しいと思う方もないでしょう…」

苦笑を浮かべた元騎士に、元姫さまは笑顔できつぱりと否定の言葉をかけた。

「いや、俺が楽しい」

「……」

悲しそうな元騎士を放って、元姫さまはパラパラと台本をめくり始める。お姫さま役と違って騎士役のセリフはそう多くないものの、立ち居振る舞いに関する記述が多い。

「あー。なあ、ここの『騎士の誓い』のどこさ。どんなのかわかる？」

あるページに書かれている文章を指さして、元姫さまが言う。

凹んでいた元騎士は指された箇所を読み、渋い顔をした。

「『跪いて誓いのポーズをとる』…。これでは何も情報が得られませんか。どのように跪いて、何を誓うのやら…」

台本を手元に戻して、元姫さまはうなずく。

「台本って、セリフ以外のところは結構アバウトなんだな。他のページもだいたいこんな感じだったし」

言われて、元騎士は自分が担当する役のセリフ以外の部分にも目を通す。確かに『お姫さまは優雅にステップを』や『お淑やかな様子でカップに』など、読み手によって表現が変わりそうな表記がなされていた。

「…私に淑やかさを求められましても…」

「…俺に騎士の立ち居振る舞いなんてできないよ…」

二人は同時につぶやいた。

そして、同時に気がつく。お手本が目の前に居ることに。

「ようは、お前みたいになればいいってことだよな。えー、つまり、私はあなたのように振舞えば良いというわけですね。…こんな感じが」

元姫さまが言って、元騎士の動作の動作をマネする。

「つまり、私はかつての姫のような振る舞いをするわけですね。…わたくしはするように足を広げて膝をついたりしませんわ」

跪いて自分の手をとる元姫さまに、元騎士が言う。

元姫さまはむっとした表情をし、少し足の位置を動かした。

「これでいかがでしょうか、姫？」

元騎士は手をのばして、元姫さまの背中をまっすぐにさせる。それからわきをしめるように腕を移動させ、ちよつと眺めて頷いた。「これならば良いでしょう。そのまま、わたくしの手をそつと支えるようにして下さい」

「違いますよ、姫。『支えるようにしてくださる？』です。」

そうして二人で口調や動きを互いに訂正しあい、騎士の誓いのポーズが完成した。なんだか楽しくなった二人は、台本にある互いのセリフや動きを一通り完成させてしまった。

翌日、役者を集めて台本を読もうとなった時に、元姫さまと元騎士の二人だけがセリフと動きを完璧に仕上げてきたため、クラスメイト達は驚いた。

そして、二人の演技は他の役者だけでなく監督役の生徒をも納得させたため、変更が入ることもなく採用された。

その年の文化祭にて。

元姫さまと元騎士が所属するクラスの出し物では、お姫様役と騎士役の二人だけ、妙にクオリティが高いと評判になったのだった。

姫さま、騎士になる（後書き）

高校生の時分には、女装するのに妙にはしゃいだものです。
あれが若さか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2682ba/>

姫さま、騎士と再会する

2012年1月10日21時47分発行